

失った夏の風物詩

一字一筆

静岡の今

98

一時は全国を覆っていた新型コロナウイルスの緊急事態宣言が5月25日にすべて解除され、マスク着用や在宅勤務(テレワーク)など新しい生活様式を模索する社会が動き出した。新年

早々から続いた「コロナ禍」による憂鬱な長いトンネルの中でこの春に失ったものは多いが、私たちは夏に向けても大きなものを失った。富士山の閉鎖と全国高校野球選手権大会の中止である。

県は18日、富士山の本県側で管理する富士宮、須走、御殿場の3登山ルート

を今夏は閉鎖すると発表した。山梨県も吉田ルートを開鎖し、富士山は史上初の「夏山閉鎖」となった。

環境省によれば、昨夏の富士山登山者は約23万6千人、うち本県側は約8万6千人だった。急増する外国人も含めて、今夏は多くの登山者が「日本最高峰」に立つ感激を味わえなくなつた。「ふじのくにづくり」を県政の理念とする川勝平太知事も「今夏の富士山は仰ぎ見る存在として、絵を描いたり俳句を詠んだりして楽しんでほしい」と呼びかけるが、多くの人が日々の一歩を、いつか登った富士登山の一歩と重ねながら生きている。

全国高校野球選手権大会の中止は20日に決まった。「夏の甲子園」として、日本の夏を象徴する国民的イベントが中止されるのは戦後初めて。春に、やはりコロナ禍で「甲子園」を失った高校球児たちは青春時代の汗と涙を表現する舞台を失った。一方で独自の地方大会の開催が各地で検討されており、静岡県の対応も近く決まる予定だ。

20日は二十四節気の「小満」。草木も花々も、鳥も虫も目を浴びて、命が次第に満ち満ちていく頃のことだ。富士の裾も、ヤマモミジなどの新緑に包まれている。今夏は登山者のいない雄大な山頂を仰ぎながら、ミクロのコロナによる被害の大きさを思った。

富士山麓の新緑＝富士市、全日写連・小林一久さん撮影

(前静岡県監査委員・富永久雄)